

【大は小を兼ねる】

この言葉は、前漢の大儒・董仲舒(紀元前176~前104年)の著書『春秋繁露』(17巻)に見えるものです。

「大きいものは小さいものの代りに用いることができる」という意味で、「小さいものよりも大きいものの方が有用である」という事を表わした諺としてよく使われる言葉です。

とはいうものの、「杓子は耳かきにはならぬ」という諺もあって、形はどんなによく似ていても「大き過ぎては使い道にならぬ」という事もありますので、必ずしも「大は小を兼ねる」わけではありません。

やはり「過ぎたるは尚及ばざるがごとし」で何事もほどほどという事が一番です。生長のはげしい子供の衣服は、「大は小を兼ねる」と言っただけで必ず大きめの衣服を選びますが、これも余り大き過ぎては子供がかわいそうです。

さて、大という字は、人が両手両足を広げて、体を大きく見せた形を表わしたもので、“おおきい”意味を表わしています。ダイ(タイ)という音は体(タイ)に関係があるようです。「こんなに大きい」という時、体を広げて“大”の字を作って見せるでしょう。つまり、“体”が“大”を表わしているわけです。

“小”という字は、丨と八とで作られ、捧(丨)を分(八)けて“小さく”するという事で“ちいさい”という意味を表わしたものです。八という字は、

“分ける”という意味(分は刀で“わける”こと)の字で、“はち”という数は、一つの物を二つに分け、また二つに分け、さらに二つに分けて出来た数です。

“小”という字の古い形に  があり、これが小という字のもとの形だという説もあります。つまり、 が変化して“小”となったのだということです。

“兼”という字は、二つの禾(稲の本字)と 廾(手)とで作られ、「二つのものを一緒に持つ」ことを表わした字です。“合わせ持つ” “かねる”という意味を表わしています。二つの仕事を合わせ行うことを“兼業”“兼務”と言ひ、その他“兼用”“(才色)兼備”などの使い方があります。

“嫌”という字は、心が二つの事にまたがってどっちつかずの不安な状態を表わした字で、“あきたらない” “ころよくない”という意味に使われる字です。“嫌”という字もこの意味に使われる事があります。

“嫌”という字は、女性がそういう状態を特に“きらう”ので、“きらう”という意味に使われますが、どっちつかずの状態なので“うたがう”という意味にも使われ、「嫌疑をかけられる」という使い方があります。

“鎌”という字は、稲を刈り取る道具“かま”を表わした字です。これは、兼が稲を合わせ手につかむことを表わしていて、文字通り、稲を刈り取る金具”であることがよく解ります。